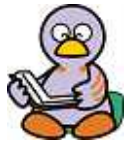


= 歴史と哲学の県立熊谷図書館 = 資料案内

Lib. Letter



埼玉県のマスコットコバト



2008 spring (3 ~ 5月) 季刊

平成20年3月1日 通巻 第12号

編集・発行 埼玉県立熊谷図書館

<http://www.lib.pref.saitama.jp/> Tel 048-523-6291

旅に生きた民俗学者宮本常一と『忘れられた日本人』

国際化や多文化社会の到来とともに、“グローバル”とか“ボーダレス”ということばが生活のなかで日常語として定着しつつある現在、われわれ日本人にとって、生涯を旅に生きた民俗学者宮本常一やその主著である『忘れられた日本人』に思いを馳せてみるのも、今日的に意味のあることではないでしょうか。

今回は、宮本常一とその著作や関係資料について取り上げてみました。

宮本常一

宮本常一は、明治40(1907)年、山口県の周防大島の貧しい農家に生まれました。このような中でも、宮本家では行商や旅芸人などをただで泊める善根宿ぜんこんやどをしていました。貧しい者や困窮者に対する共感の念は、自身の性格もさることながら、このような家庭環境で培われたものなのでしょう。幼少の頃、祖父から寝物語にたくさんの童歌、民謡、昔話を聞いて育ち、長じて郵便局員、小学校教師を経て、昭和14(1939)年渋沢敬三の強い勧めで、彼が主宰するアチック・ミュージアム(屋根裏博物館)入りを果たしました。それを機に本格的な旅から旅の生活が始まり、渋沢の「日本列島の白地図の上に宮本の足跡を赤インクで印したら、日本列島は真っ赤になる。」との有名なことばがあります。

宮本は民俗学以外にも農業技術や離島振興に関心を寄せ、佐渡鬼太鼓の復活、八珍柿の産業化、周防猿回しの復活にも尽力しました。そして、民俗学以外の分野の研究者にも大きな影響を与えました。

大学を退職後、故郷の周防大島への郷土大学の設立に尽力しましたが、昭和56(1981)年73歳で亡くなりました。



※ 島で生まれたことが、その後の瀬戸内海や島嶼(トクヨ)の研究に影響したといわれています。

『忘れられた日本人』

この著作は宮本の代表作といわれています。今から一昔前の古老とよばれる人々が

らの探訪調査の記録を主としたものです。福島県の篤農家一人を除けば、対象はすべて西日本の出身者です。職業も篤農家、漁師、農民、渡り大工、牛の仲買人など様々で、宮本に記録されなければ永遠に忘れ去られたはずの、かつての日本のどこにでも見られた庶民とよばれる人々の伝承の記録です。“あとがき”の「今老人になっている人々が、その若い時代にどのような環境の中をどのように生きて来たかを描いて見ようと・・・、現在につながる問題として、老人たちのはたしてきた役割を考えて見たくなった・・・」ということばが印象に残ります。

『忘れられた日本人』ちょっといい話（概略）

奥三河の名倉に探訪に行ったときの話である。集まってくれた老人が万歳峠の話をしてくれた。出征の時、村から山をこえて出て行くのにその峠の頂上で万歳をし別れの挨拶をすると、出征兵はすぐ下の茂みに隠れて見えなくなってしまう。名残を惜しむという風情が少しもない。それで別れの場所を少し手前にした。挨拶、万歳をして出征兵はふりかえり、ふりかえり見送りの人々と別れたという。その短い時間は生死もどうなるのかわからない人々とその家族にとっては、つかの間のひとときであったのだろう。

～同書「村の寄りあい」より万歳峠の話～

ある男性は非常に働きものである。自分のたんぼの前の家の灯りがついていれば夜の9時頃まで働くことがある。その男性はその家を夜の遅い家だと思っていたのだが、彼が遅くまで仕事をしやすいようにと、その家は灯りをつけていたのだということが、ある老婆の話によって知らされる。老婆の話がなければ、それは永遠に知られなかった事実である。少し前の日本では、あえて語らずとも、このような助け合いの精神はいきていたのである。

～同書「名倉談義」より～

参考文献

- 『旅する巨人』佐野眞一著 文芸春秋 1996 (289.1ミ)
『民俗学の旅』宮本常一著 講談社 1993 (B289.1ミ) ほか

宮本常一関係資料

《著作》

- 『宮本常一著作集 1～49・別』宮本常一著 未来社 1974～2007 (380.8ミ) 県浦
『日本の子供達 - 写真でみる日本人の生活全集 - 』宮本常一著 岩崎書店 1957 (384Mi) 県浦
『僻地の旅』宮本常一著 修道社 1960 (291Mi) 県熊
『秘境』宮本常一著 有紀書房 1961 (291Mi) 県熊
『甘藷の歴史 - 日本民衆史 - 』宮本常一著 未来社 1962 (616.8ミ) 県浦
『開拓の歴史 - 日本民衆史 - 』宮本常一著 未来社 1963 (611.2ミ) 県浦
『日本祭礼風土記 第1～3』宮本常一編 慶友社 1962～1963 (386.2ニ) 県浦
『海に生きる人びと』宮本常一著 未来社 1964 (384.3ミ) 県浦
『離島の旅』宮本常一著 人物往来社 1964 (291Mi) 県熊
『村のなりたち - 日本民衆史 - 』宮本常一著 未来社 1966 (384.1ミ) 県浦
『町のなりたち - 日本民衆史 - 』宮本常一著 未来社 1968 (384.1ミ) 県浦
『庶民の旅』宮本常一著 社会思想社 1970 (B682Mi) 県浦
『伊勢参宮』宮本常一著 社会思想社 1971 (B175.8ミ) 県熊
『旅の民俗 - のりものとはきもの - 』宮本常一著 社会思想社 1972 (B384.3ミ) 県浦
『民俗のふるさと - 日本の民俗 - 』宮本常一著 河出書房新社 1975 (382.1ミ) 県浦
『日本の海洋民』宮本常一・川添登編 未来社 1976 (384ニ) 県浦

- 『食生活の構造』宮本常一・潮田鉄雄著 柴田書店 1978 (383.8Mi) 県浦
- 『野田泉光院 - 旅人たちの歴史 - 』 宮本常一著 未来社 1980 (291ノ) 県熊
- 『日本文化の形成 講義 1～2』宮本常一著 そしえて 1981 (210.3ニ) 県熊
- 『日本文化の形成 遺稿』宮本常一著 そしえて 1981 (210.3ミ) 県熊
- 『家郷の訓』宮本常一著 岩波書店 1984 (B384カ) 県浦
- 『塩の道』宮本常一著 講談社 1985 (B382.1ミ) 県浦
- 『旅の民俗と歴史 1～10』宮本常一編著 八坂書房 1987～1988 (682.1ミ) 県浦
- 『忘れられた日本人』宮本常一著 岩波書店 1995 (388.1ワ) 県浦
- 『空からの民俗学』宮本常一著 岩波書店 2001 (B382.1ワ) 県浦
- 『宮本常一、アフリカとアジアを歩く』宮本常一著 岩波書店 2001 (B382.45ミヤ) 県浦
- 『イザベラ・バードの「日本奥地紀行」を読む』宮本常一著 平凡社 2002 (291.09イ) 県熊
- 『宮本常一の写真に読む失われた昭和』佐野真一著 平凡社 2004 (210.76ミヤ) 県熊
- 『宮本常一写真・日記集成 上・下巻』宮本常一著 毎日新聞社 2005 (D289.1ミヤ) 県熊
- 『宮本常一写真・日記集成 別巻』宮本常一著 毎日新聞社 2005 (D289.1ミヤ) 県熊
- 『宮本常一の見た府中』府中市郷土の森博物館 2007 (213.65ミヤ) 県熊

《伝記》など

- 『彷徨のまなざし - 宮本常一の旅と学問 - 』長浜功著 明石書店 1995 (289.1ミ) 県熊
- 『旅する巨人 - 宮本常一と洪沢敬三 - 』佐野真一著 文芸春秋 1996 (289.1ミ) 県熊
- 『宮本常一が見た日本』佐野真一著 NHK出版 2001 (289.1ミ) 県熊
- 『宮本常一の伝説』さなだゆきたか著 阿吽社 2002 (289.1ミヤ) 県熊
- 『宮本常一のまなざし』佐野真一著 みずのわ出版 2003 (289.1ミヤ) 県熊
- 『写真でつづる宮本常一』須藤功編 未来社 2004 (289.1ミヤ) 県熊
- 『宮本常一同時代の証言 正・続』宮本常一先生追悼文集編集委員会編 777書店 2004 (289.1ミヤ) 県熊
- 『「忘れられた日本人」の舞台を旅する - 宮本常一の軌跡 - 』木村哲也著
河出書房新社 2006 (289.1ミヤ) 県熊

このリストは県立図書館で所蔵している資料の一部です。

資料と所蔵館

前記「関係資料」のそれぞれの資料の末尾に所蔵館が記載されていますが、ご覧いただいたとおり、宮本常一に関する資料でも所蔵館が異なります。それは図書館が著作物を主題(内容)によって分類をしているからです。宮本常一は民俗学者ですから、彼の著作の多くは民俗学として社会科学分野の民俗学に分類されます。しかし、彼の生涯やその人物についての著作物は伝記として歴史の分野に、また地誌関係の著作は地理の分野に分類されます。

このような関係で、社会科学を分担する浦和図書館と歴史地理を分担する熊谷図書館とに「関係資料」が分かれて所蔵されることになります。

= 新着資料案内 =

- 『事例で学ぶ*テキストマイニング』村田真樹[ほか]著 共立出版 2008 (007.6シ)
- 『青少年のための自殺予防マニュアル』高橋祥友編著 金剛出版 2008 (145.7セ)
- 『時間の思想史』瀬戸一夫著 勁草書房 2008 (132.2カ)
- 『システム基盤の統合ノウハウ』谷口俊一[ほか]著 日経BP社 2008 (007.61シ)

- 『情報品質管理』リチャード・Y・ワン [ほか] 編 中央経済社 2008 (007.3シヨ)
- 『見るちから - 古代のものの見方から現代の知覚論まで - 』菅野理樹夫著 北樹出版
2008 (141.27ミル)
- 『戦後日本における市民意識の形成 - 戦争体験の世代間継承 - 』浜日出夫編
慶応義塾大学出版会 2008 (210.76セソ)
- 『ホモ・ネカーンス』ヴァルター・ブルケルト著 法政大学出版局 2008 (164.31枳)
- 『謙信公御書集 - 東京大学文学部蔵 - 』臨川書店 1999 (210.47ケ)
- 『覚上公御所集 - 東京大学文学部蔵 - 上・下』臨川書店 1999 (210.47カ)
- 『公共図書館の自己評価入門』神奈川県図書館協会図書館評価特別委員会編
日本図書館協会 2007 (013.5コウ)
- 『東亜同文書院大旅行誌 1～33』東亜同文書院編 愛知大学 2006 (292.2ト)

《新着資料から》 - 『東亜同文書院大旅行誌』について -

東亜同文書院は、明治34(1901)年に中国の上海に日本人によって設立された高等教育機関で、戦前海外に設立された高等教育機関としては最も古く、昭和17(1942)年大学として格上げになりました。日本人学生には徹底した中国語教育が行われ、日中に貢献する多くの逸材が育っています。

学生たちは卒業記念として中国各地へ数ヶ月に及ぶ大旅行を試み、『東亜同文書院大旅行誌』として毎年単行本として出版されました。当時の中国の実情を伝えるものとして非常に貴重な資料です。

なお、東亜同文書院は日本の敗戦により中国からの撤退を余儀なくされましたが、戦後関係者の尽力によって愛知大学として再生創立されました。



図書館の言葉

- 「総記」について -

我が国の公共図書館のほとんどは、資料の分類に「日本十進分類法」を使っています。最も大きな単位である10分類(类目)は表のとおりですが、県立3館で熊谷図書館が受け持っているのが0類・1類・2類です。1、2類の哲学・宗教、歴史・地理は誰でもお分かりのことですが、0類の総記とは何なのでしょう。

分類	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
主題	総記	哲学 宗教	歴史 地理	社会 科学	自然 科学	工学 技術	産業	芸術	語学	文学

「総記」という言葉自体は図書館専門用語ではありませんが、図書館での「総記」とは次のようなものです。

- 主題がいくつかの類、またはすべての類にまたがる総合的な内容を持つ資料、ならびにどの類にも属さない資料のことで、たとえば、百科事典、一般論文集、新聞、叢書などをいう。 - 【図書館用語辞典】より -

- 主題がいくつかの類、またはすべての類にまたがる総合的な内容を持つ資料、ならびにどの類にも属さない資料のことで、たとえば、百科事典、一般論文集、新聞、叢書などをいう。 - 【図書館用語辞典】より -